17　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。　　〈東京大〉二〇二二年度出題

　五年ほど前の夏のことだ。カイロの考古学博物館で私はある小さな経験をした。一人で見学をしていたとき、ふと見ると日本のツアー団体客がガイドの説明に耳を傾けていた。私は足を止め、団体の後ろで何とはなしにその解説を聞いていた。その前にすでに、仕事柄多少は理解できる他の言葉、英語やフランス語で他の国々の団体客向けになされていた解説もそれとなく耳に入っていたから、私にはそれは、ごく自然な、行為ともいえないような行為だった。ところが、日本人のガイドはぴたりと説明を止め、私を指差してこう言ったのだ。「あなたこのグループの人じゃないでしょ。説明を聞く資格はありません！」

　要するに、あっちに行けということである。エジプトの博物館で、日本人が日本人に、お前はそこにいる権利はないと言われたのである。そのとき自分がどんな表情をしていたか、われながら見てみたいものだと思う。むっとしていたか、それともきまり悪そうに小さな笑みを浮かべていたか。少なくとも、とっさに日本人でないふりをすることはできなかった。

　この状況は、ちょっと考えてみるとなかなか奇妙なものだ。というのも、私がこんな目に遭う危険は、日本以外の国のツアー客に「パラサイト」しているときにはまずありえないからだ。英語やフランス語のガイドたちは自分のグループのそばに「アジア人」が一人たたずんでいても気にも留めないだろう。それに、顧客以外の誰かが自分の説明に耳を傾けていたとして、それがガイドにどんな不都合になるというのか。博物館内の、障壁のない、公的な空間で、自分の言葉を対価を払った人々の耳だけに独占的に届けよう、どんなにおとなしくしていても「たかり」は「たかり」、「盗み聞き」は断固許すまじという使命感。それは空しい使命感にちがいない。日本語の分かる非日本人はいまではどこにでもいるし、私のような顔をしていないかもしれないし、まして私のような反応は、おそらく誰もしないだろうから。

　しかし、その日ガイドの「排外神経」の正確な標的になったのは私だった。彼女は私が日本人であることを見切り、見とがめられたのちの私の反応も読んでいた。私は自分の油断を反省した。日本人がこのような状況でこのように振る舞いうることをうっかり忘れていたのである。日本にいるときはこちらもそれなりに張りつめている神経が、外国だからこそａユルんでいたらしい。日本のなかでは日本人同士種々の集団に分かれてたがいに壁を築く。しかし、ひとたび国外に出れば……。だがそれは、菊の紋章付きの旅券を持つ者の、無意識の、甘い想定だったようだ。アその「甘さ」において私はまぎれもなく「日本人」だった。「日本人」だったからこそ日本人にパラサイトの現場を押さえられ、迫い払われ、そして、逆説的にも、その排除を通じてある種の帰属を確認することを余儀なくされたのである。

　このでｂコッケイな場面が、このところ、「ナショナルな空間」というものの縮図のように思えることがある。ときどき考えるのだが、このときの私とガイドをべた場合、どちらがより「ナショナリスト」と言えるだろう。「同じ日本人なんだからちょっと説明を聞くくらい……」と、「甘えの構造」の「日本人」よろしくどうやら思っていたらしい私の方だろうか。それとも、たとえ日本人でも「よそ者」は目ざとく見つけ容赦なく切り捨てるガイドの方だろうか。確かだと思えるのは、私のような「日本人」ばかりではナショナリズムを「立ち上げる」のは容易ではないだろうということ、日本のナショナリズムは、かつても現在も、このガイドのようにきちんと振る舞える人々を欠かせない人材として要請し、養成してきたに違いないということである。少なくとも可能的に、「国民」の一部を「非国民」として、「身中の虫」として、摘発し、切断し、除去する能力、それなくしてナショナリズムは「外国人」を排除する「力」をわがものにできない。それはどんなナショナリズムにも共通する一般的な構造だが、日本のナショナリズムはこの点で特異な道を歩んでもきた。この数十年のあいだ中流幻想に浸っていた日本人の社会は、いまふたたび、急速に階級に分断されつつある。それにつれてナショナリズムも、ふたたび、イその残忍な顔を、〈外〉と〈内〉とに同時に見せ始めている。

　もちろん私は、この出来事の後、外国で日本人の団体ツアーにはけっして近づかないようにしている。「折り目正しい」日本人でないことが、いつ、なぜ、どうして「ばれる」か知れたものではないからだ。しかし、外国ではにも、私は日本人の団体に近づかない「自由」がある。でも、日本ではどうだろう。日本人の団体の近くにいない「自由」があるだろうか。この「自由」がないかきわめて乏しいことこそは、近代的な意味で「ナショナルな空間」と呼ばれるものの本質ではないだろうか。

　子供も、大人も、日本にいる人はみな、たとえ日本で生まれても、日本人の親から生まれても、ただひとり日本人に取り囲まれている。生まれてから死ぬまで。そして、おそらく、死んだあとも。「ただひとり」なのは、生地も血統も、その人の「生まれ」にまつわるどんな「自然」も、自然にその人を日本人にはしてくれないからだ。

　ナショナリズムnationalismというヨーロッパ起源の現象を理解しようとするなら、nationという言葉の語源だけは知っておきたい。それはラテン語で「生まれる」という意味のnasciという動詞である。この動詞から派生した名詞natioはまず「出生」「誕生」を意味するが、ラテン語のなかですでに「人種」「種族」「国民」へと意味の移動が生じていた。一方、「自然」を意味するラテン語、英語やフランス語のnatureのもととなったnaturaも、実は同じ動詞から派生したもう一つの名詞なのだ。この言葉もやはりまず「出生」を意味する。そして英語でnaturallyと言えば、「自然に」から転じて「当然に」「自明に」「無論」という意味になる。

　「生まれ」が「同じ」者の間で、「自然」だからこそ「当然」として主張される平等性。そして、それと表裏一体の、「生まれ」が「違う」者に対する排他性。歴史的状況や文化的文脈によってナショナリズムにもさまざまな異型があるが、この性格はこの政治現象の不変の核と言っていいだろう。だからいまも、世界のほとんどの国で、国籍は生地か血統にもとづいて付与されている。

　しかし、生地にしても血統にしても、「生まれ」が「同じ」とはどういう意味だろう。ある土地の広がりが「フランス」とか「日本」という名で呼ばれるかどうかは少しも「自然」ではない。ウ文字通りの「自然」のなかには、もともとどんな名も存在しないからだ。また両親が「同じ」でも、たとえ一卵性双生児でも、人は「ただひとり」生まれることにかわりはない。私たちは知らないうちに名を与えられ、ある家族の一員にされる。それがどのようになされたかは、言葉を身につけたのち、人づてに聞くことができるだけだ。親が本当に「生みの親」かどうか、自然に、感覚的確信に即して知っている人は誰もいない。が同じであることも、母の言葉が母語になったことも、顔が似ていることも、何も私の血統を自然にはしない。

　一言で言えば、あらゆるナショナリズムが主張する「生まれ」の「同一性」の自然的性格は仮構されたものなのだ。それは自然ではなく、ひとつの制度である。ただし、他のどんな制度よりも強力に自然化された制度である。日本語で「帰化」（もともとは天皇の権威に帰順するという意味）と呼ばれる外国人による国籍の取得は、フランス語や英語ではnaturalis（z）ation、「自然化」と呼ばれる。この言葉は意味ｃシンチョウだ。なぜなら、外国人ばかりでなく、たとえば血統主義の国籍法を採用する日本で日本人の親から生まれた人でも、その人に国籍が付与されるとき、あるいはその人がなにがしかの国民的同一性を身につけるとき、それはいつでも、自然でないものを自然なものとする操作、つまり「自然化」によってなされるしかないからだ。

　「自然化」とは、繰り返すが、自然でないものを自然なものとする操作のことである。言い換えれば、この操作はけっして完了することがない。そして、いつ逆流するか分からない。「非自然化」はいつでも起こりうる。昨日まで自然だったこと、自然だと信じていたことが、突然自然でなくなることがある。だから、エ日本人であることに、誰も安心はできない。

（鵜飼哲「ナショナリズム、その〈彼方〉への」による）

〔注〕　○パラサイト――寄生。

　　　　○菊の紋章付きの旅券――日本国旅券（パスポート）のこと。表紙に菊の紋章が印刷されている。

　　　　○「甘えの構造」――ここでは、精神分析哲学者の土居健郎が提唱した著名な日本人論を指す。日本人の心性の大きな特徴として「甘え」の心理を論じた。

問１　「その『甘さ』において私はまぎれもなく『日本人』だった」（傍線部ア）とはどういうことか、説明せよ。

問２　「その残忍な顔を、〈外〉と〈内〉とに同時に見せ始めている」（傍線部イ）とはどういうことか、説明せよ。

問３　「文字通りの『自然』のなかには、もともとどんな名も存在しない」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。

◎ 問４　「日本人であることに、誰も安心はできない」（傍線部エ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえて一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。

問５　傍線部ａ・ｂ・ｃの力夕力ナに相当する漢字を楷書で書け。

ａ　ユルんで　　ｂ　コッケイ　　ｃ　シンチョウ

【解答と採点基準】

問１　Ａ日本国内では集団同士の排他性を意識する筆者が、Ｂ国外では日本人としての帰属意識から生じた甘えに、Ｃ日本人の特質を再確認したこと。

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４〔「日本国内では、日本人の集団同士が排他的である」という内容は必須。〕

Ｂ＝４〔「国外ゆえに、日本人という集団への帰属意識が生まれたことが甘えである」という内容は必須。〕

Ｃ＝２〔「改めて自覚した」という内容があれば可。〕

問２　Ａ集団意識に忠実な日本人は、Ｂ階級の分断が急速に進むにつれ、Ｃ外国人と自らが所属する集団以外の日本人の排除をＤ同時に加速させているということ。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２〔「集団意識に日本人が忠実だ」という内容があれば可。〕

Ｂ＝３〔「急速に階級に分断されつつある」という内容があれば可。〕

Ｃ＝３〔「外国人と、自分が所属する集団以外の日本人の排除」という内容は必須。〕

Ｄ＝２〔「外国人と日本人同士の両方で同時に起こっている」という内容があれば可。〕

問３　Ａあるがままの自然状態では、Ｂ本来何ものも名づけられておらず、Ｃ生地や血統のような自然に見えるものも、Ｄ人為的に仮構された制度だということ。

Ａ＝２〔「文字通りの『自然』」の説明であれば可。〕

Ｂ＝２〔「名づけられていない」という内容があれば可。〕

Ｃ＝３〔「生地」や「血統」という具体的説明がなければ減点２。〕

Ｄ＝３〔「名づけられたすべてのものが人為的で仮構だ」という内容であれば可。〕

問４　Ａ生まれの同一性を拠り所とするナショナリズムは、Ｂ本来個として誕生した人間を日本人として扱うが、それはＣ仮構された制度で、Ｄ恣意的に作り変えることが可能なので、Ｅ今は日本人であっても突如として異質な存在とみなされ、排除される危険性があるということ。（119字）

Ｅがなければ全体０。

Ａ＝２〔「ナショナリズムが『生まれ』を本質とする」という内容は必須。〕

Ｂ＝２〔「人間は『ただひとり』として生まれる」という内容であれば可。〕

Ｃ＝２〔「『日本人』という自然に見える概念も仮構だ」という内容であれば可。〕

Ｄ＝２〔「『日本人』という概念は可変的である」という内容は必須。〕

Ｅ＝２〔「日本人であっても排除の対象になり得る」という内容であれば可。〕

問５　ａ＝緩（弛）　　ｂ＝滑稽（𥡴）　　ｃ＝深長